

鴨東通信

夏

2016.7 No.102

鍾母子

士新所贈

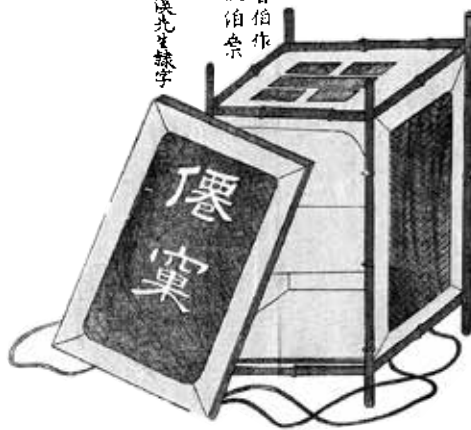


合龍 爐

北川省伯作

號淡伯奈

衆爲漢先生錄字



高一尺一寸方八寸五分
格上間一尺餘格下五寸

●日常語のなかの歴史15
なつたいや【熱帯夜】

中牧弘允

●てーたいむ

売茶翁の引力

ノーマン・ワデル

●本づくり温故知新3

芸艸堂

●エッセイ

和食の基本は、だしにあり

後藤加寿子

高野山の「笹簇」

中安真理

●リレー連載 世界のなかの日本研究23

世界のなかの神道研究

ジョン・ブリン

●史料探訪63

任官雜例抄

長村祥知

売茶翁の生涯

ノーマン・ワデル著 樋口章信訳

評定
書ター
集
ネサ
詳細は32頁

「ただにて飲むも勝手なり」

自在に京の景勝地で茶店を開いて煎茶を売り、その深い精神性で、庶民だけでなく伊藤若冲や池大雅ら当代一流文化人を魅了した、十八世紀日本における風狂の禅僧、売茶翁。謎に包まれた「茶神」の人生と思想が、その墨跡や書簡からひもとかれる。

目次

- プロローグ 売茶翁との出会い／売茶翁の伝記資料／売茶翁の生涯の時期区分
- 第一章 肥前時代 誕生／肥前の風土と環境／黄檗僧として得度／化縁道龍と独湛性登／高山寺に惹かれる／仙台での修行／律学を学ぶ／師に随行／大潮元皓／龍津寺に居す／自説的な人柄
- 第二章 京都へ 売茶翁が注目される理由／京都／消息不詳の十数年間／藩主の弟への手紙／各宗の指導者たちとの交流／幻庵／萬福寺の内情に通じる
- 第三章 東山で茶を売る 通仙亭／『対客言志』／京の文人たちが見た売茶翁／江戸時代の茶の種類／売茶翁の茶の背景にあるもの／日本人が生産した煎茶／越溪茶／京の文人たちとの交流／売茶翁の茶の精神／売茶翁の漢詩／景勝地での茶の商い
- 第四章 肥前に戻る 草川玄道への手紙／大潮元皓と売茶翁／大坂屋敷詰め
- 第五章 在家居士として 居士号「高遊外」／帰京／湯屋谷の水谷宗円／双ヶ丘時代／相国寺林光院での十年間／大典顕常／宇野明霞／売茶翁の茶道具／彭城百川／「自贊三首」／礼の森を遺道して／売茶翁の侍者たち／唯一の著作／臨川寺／新長谷寺／東岩倉／高美蓉
- 第六章 最後の十年 聖護院村で交流した友人たち／黄檗僧、独湛性登への想い／およしへの手紙／茶道具の焼却／百拙元養／質素に生きる／池大雅／伊藤若冲／翁を案じる女性たち
- 第七章 最晩年 無住と大用／観性尼／安田是誰／古道浄寛／老齢を超越した境地／最期までの数か月／「売茶翁偈語」
- エピローグ 地方の有力な支持者たち 新たに知られた交流／松波治部への進付録 盧同の「茶歌」
- 石川永庵と伊藤若冲

▼A5判・二五六頁／本体三、五〇〇円

ノーマン・ワデル…大谷大学名誉教授

禅語辞典

入矢義高監修／古賀英彦編著

禅語録中の難解な語句すべて(約五、五〇〇)について、平易なことばで解説を施した画期的な辞典。中国語学研究の第一人者である入矢義高氏監修のもと、古賀英彦氏が十年の歳月を費やして今に完成する。いわゆる漢文の語法では読めない口語の解説が備わり、禅宗寺院・茶道家・宗教史研究者は勿論のこと漢文を読むすべての人に必携の書。

▼A5判・六〇〇頁／本体九、五〇〇円

黄檗文化人名辞典

大槻幹郎・加藤正俊・林雪光編著

わが国の近世文化にカルチャーショックを与えた黄檗文化の総合辞典。黄檗僧はもとより檀越・外護者・学者・画家などの黄檗文化形成に寄与した人物(九〇〇人)のほか、黄檗法系諸と総索引を収録。総索引は僧名(道号)、法諱・法諱(諱字)・別号・檀越帰依者の五索引を収めた。

▼菊判・七二〇頁／本体一五、〇〇〇円

茶と室内デザイン

小泉和子編

茶が日本住宅の室内意匠にあえた影響について、それぞれの専門の立場からの論考を収録し、豊富なカラー図版とともに、茶道と室内デザインの関係性を考える一書。

▼B5判・一二四頁／本体三、五〇〇円

田能村竹田基本画譜(全2巻)

宗像健一編

図版篇には厳選された一四〇点の作品を大型図版で収録。解説篇には総論と基本作品の詳細を極めた個別解説のほか、題詩・落款・印譜・年譜などを収録。

▼B4変型・三九八頁／本体二八、〇〇〇円

没後三二〇年 蕪村

逸翁美術館・柿衛文庫編

南画・俳諧、さらに俳画の大成者として輝かしい足跡を残した与謝蕪村(一七一六―一八三三)の没後三二〇年を記念し、逸翁美術館と柿衛文庫が共同で編集。

▼A4判・二一〇頁／本体二、二〇〇円

ねったいや【熱帯夜】

日本の夏は蒸し暑く、寝苦しい。とくに東京や大阪などの大都會では、ヒートアイランド現象をもなつて、その感が強い。そして、最近でこそ「夏日」や「真夏日」に押されて減つたが、しばしば「熱帯夜」という表現が人びとの口にのぼる。それどころか、俳句の季語にすらなつてい

る。
熱帯夜とは「暑くて寝苦しい夜。最低気温がセ氏二五度より下がらない夜（広辞苑）とある。気象庁が言いだした用語かと思いきや、気象エッセイスト倉嶋厚氏の造語である。しかもセ氏三〇度以上の夜のことは「超熱帯夜」と呼ぶらしい。

しかし、熱帯の夜はそんなに蒸し暑いのか。わたしのアマゾン体験からすると、それは真逆である。南米の熱帯雨林では夜は涼しく、雨季であつても快適にすごすことができる。ハンモックに寝れば、さらに快眠が保証される。むしろ、ハンモックで身を包み込まなければ、寒いくらいなのである。

日常語の歴史 なかの歴史

15

◎日常語のなかで、歴史的語源やエピソードを取り上げ、研究者が専門的視野からご紹介します。

ブラジル・アマゾンの先住民と一緒に川べりで一夜をすごしたことがある。かれらは暖をとるのに二つの方法をもちいていた。ひとつは焚火である。夕食の際、とった魚を焼くために火を起こし、そのまま焚き木をくべて夜にそなえた。もうひとつは、砂地に浅い窪みをつくつて体を横たえたのである。

昼間、セ氏四〇度前後に熱せられた大地は、表面の冷えた砂を取り除くと、地熱を体に直接伝えてくれるのである。

そして、深夜になると、川面からもやが立ちのぼった。気温が水温よりも低いときにおこる現象である。日本の「熱帯夜」でも海面の温度のほうが高いのだが、こちらは盛夏にはセ氏三〇度をこえるため、「風呂効果」で沿岸地帯では深夜になつても気温がさがらない。

世界の熱帯雨林の半分以上を占めるアマゾンでは、年間の平均気温はあまり変わらず、雨の影響もあり、夜はセ氏一〇度までさがる。アジアやアフリカの熱帯はいざ知らず、ことアマゾンに関しては「熱帯夜」という用語はいささか失礼な表現であると言わざるをえない。

(中牧弘允・文化人類学者)

——アメリカ出身で、長く日本文化（禅文化）研究に携わってきたノーマン・ワデル氏が、二〇〇八年に売茶翁の伝記の英語版を出版。その後も研究を続け、いよいよ日本向けに書きあらためた『売茶翁の生涯』が刊行の運びとなりました。

●売茶翁と出会う

——売茶翁（一六七五―一七六三）といえ、日本では一般に煎茶道の祖と知られています。なぜ売茶翁研究を？

売茶翁と最初に出会ったのは四十五年ほど前、京都の寺町にある古書店、其中堂（なかうちどう）です。そこで売茶翁の漢詩の本を見かけて、表紙には伊藤若冲（えとうわく）筆の売茶翁の肖像画がありました。その絵の印象が強かったのか、とにかく買いました。それまで売茶翁のことは、全然知りませんでした。

当時私は、鈴木大拙（だいせつ）の『日本的靈性』を翻訳する仕事や、鈴木先生が創刊した海外に仏教を紹介する雑誌（*The Eastern Buddhist*）の編集をしていました。その雑誌は主に近現代の仏教者（鈴木大拙、西谷啓治、久松真一など）の文

ていーたいむ

ばい さ おう 売茶翁の引力

ノーマン・ワデル

（大谷大学名誉教授）

章を翻訳・紹介する内容でしたが、私は古典翻訳をすることも大事な仕事だと考えて、『葉根譚』（中国明代の古典）や盤珪（ばんけい）禪師の伝記などの翻訳を進めていました。そのような翻訳の仕事に携わっていた一九七〇年代は、禅の修行がアメリカで広がり始めた時でした。たとえば盤珪の翻訳を読んだ読者から反響があり、手紙もくるわけです。盤珪によって自分の人生が変わった、とか。その後、編集長の西谷先生と阿部正雄先生の指導を受けながら、道元の『正法眼蔵（しょうぼうがんざう）』の翻訳も試みました。

その仕事の合間、ついだという感じで、売茶翁の漢詩を翻訳し始めました。興味があつたからずっと続けられたのだと思います。当時は売茶翁の伝記といえ、売茶翁の友人である禅僧、大典（だいてん）顕常（けんじょう）（一七一九―一八〇一）の書き残した『売茶翁伝』、昭和時代に編纂された年譜類、あるいは売茶翁の漢詩ぐらいいしかなかったんです。

売茶翁の代表的な漢詩、大典和尚の伝記の英訳、それに売茶翁の年譜に基づいた略伝を雑誌に発表しますと、もっと売茶翁について知りたいという反応が、欧米の読者たちから寄せられ

ました。当時はその程度の伝記が限界で、もっと詳しいものを作るには、やはり翁の手紙資料に取り組む以外に道はない、としいにわかつてきました。そのため、焦点を翁の手紙の研究にあて、くずし字、候文^{きこうぶん}などの勉強にとりかかりました。

翁の手紙のうち、二十数通は福山朝丸氏の『売茶翁』に発表されていましたが、かなりの数の未発表の手紙を美術館や個人所蔵のものの中に見つけるようになり、また古書店や骨董屋の目録に出るものを待ち、それとおぼしきものを見つけたら、解説する作業が何十年も続き、翁の七十〜八十歳代に書かれた書簡から、その思想や生活ぶりが少しずつ浮かび上がってきました。

書簡を解説する作業は、いままでの研究生活のなかで、一番おもしろい仕事の一つでした。そのためか、白隠^{はくいん}慧鶴^{えいかく}（一六八六〜一七六九）の書簡にも目を向けるようになり、やがてその書簡集を一冊にまとめて出版しました。白隠が得意とする自伝的な仮名法語はもちろん大事ですが、しかし偉大な禅者の日常的な側面——人間白隠——はやはり手紙の書面から垣間みることしかできないでしょう。

——出版までの経緯は？

英語版の『売茶翁』を出版しようと思って出版社にもちかけたとき、売茶翁の伝記部分をもう少し詳しく、といわれました。あらためて相談をした次の出版社から、伝記の部分がちよつと多すぎると言われ……本の六割ぐらい伝記だったものを、三割ぐらいにして、やむをえず、伝記部分の残りは巻末註に入れました。そ

うすると読者から、伝記がおもしろいの、どうして字が小さくて読みにくい巻末註に入れたのかと言われました。

今回、日本語版の出版にあたっては、日本の読者を対象にして、まずそれをすべてもとの伝記の本文に戻したうえで、新しく発見した手紙のことなども加えて、全面的に文章を書き直すことにしました。それを樋口章信氏と検討しながら翻訳して頂きました。

●売茶翁が生きた時代

私はむかしカリフォルニア大学バークレー校で英文学を専攻しましたが、当時はヴィクトリア時代の文学や文化は人気がありませんでした。ところがいまではそれは非常に盛んな研究分野になってきました。似たような現象が日本でもあったと思います。現在注目される江戸時代の文化ですが、昭和四〇年頃には、その関心はそれほどではなかったように記憶しています。

長い間日本に住み、江戸中期の絵画を眺めていますと、あの西洋の伝統的な油絵の大半が退屈に思えてしまい、江戸中期の文人画、禅画、あるいは俳画のすばらしさにだんだん感動するようになりました。そののびのびした独創性に富んだ絵画に、限らない魅力を感じています。そういう芸術文化が華やかに開いていた、おもしろい時代の京都に売茶翁が生き、その中心的な人物であったと指摘する学者もあります。売茶翁の書も好きですが、もっと注目されてもよいと思います。黄檗^{おうはく}禅の中国風なものの影響を受けながらも、中国の僧侶たちのような油こさがなく、淡泊でいい。

個人的に売茶翁の書風の方が好きですね。

——売茶翁をとりまく人間関係も興味深いです

売茶翁と同時代を生きた臨済宗の禅僧、白隠の在家の弟子のひとりに、白隠に参じていた文人画家、池大雅（一七二三～一七六七）がいます。大雅は売茶翁と親交がありました。白隠が六七歳で妙心寺を訪問したさい、相国寺と縁が深かった宝鏡寺とその尼寺にも招かれ、提唱（禪の講説）を行った。当時、売茶翁は七七歳で、すぐ近くの相国寺の塔頭林光院にいました。歩いて行けるほどの距離でした。当時話題の禅者白隠の説法に売茶翁も出席したと想像したいのですが、翁と白隠を結ぶ証拠は残念ながらいまのところ、何も見つかりません。

いま話題の絵師、伊藤若冲（一七一六～一八〇〇）の若い時のことについてはあまり詳しくはわかっていないようです。しかし売茶翁の八十歳前後に肖像画を描いていることは事実でしょう。また相国寺で八十歳代の売茶翁に出会っているのも間違いのないだろうと思います。若冲が売茶翁像を一番多く描いていますが、彭城百川と池大雅をふくめ一流画家たちのほとんどが、生存中の翁の姿を描き残している。翁がなくなつてからは、浦上玉堂、田能村竹田、渡辺華山らもそれぞれ翁の姿を一回以上描いています。その描写はさまざまで、池大雅による布袋さんのように描かれた画像もあれば、玉堂や竹田によるやせ細ったイメージもあります。残された手紙から読みとるかぎり、売茶翁は謙虚な人物であつたようで、自分が高僧的に描かれた肖像画に賛語を書くのを嫌

がつており、頼まれるとすぐ断つて、送り返すという内容の手紙もあるほどです。書簡から見えてくる売茶翁像と、描かれるイメージはちがつて見えるものが多いですが、今回の本のカバー画像は、若冲が描いた画像のうち、私のイメージする売茶翁像に近いかもしれません。

●いま、注目される売茶翁の生き方

「時節因縁」という仏教用語があります。ちょうど時期が到来して、因縁の合する機会を意味しますが、数年前欧米では日本の煎茶が流行して、緑茶の喫茶店がアメリカ西海岸を中心にして現れるようになった時期にちょうど、英語版の『売茶翁』が出た。アメリカの書評では、芭蕉や良寛のような大詩人が見つかったと評価されました。それはいささか言いすぎかもしれませんが、とにかく海外では売茶翁が評価されたのです。私が予想していなかった、おもしろい論評もあり、たとえば、日本文化に関心をもつ人たちにとつて、芭蕉や良寛のような新しい禅詩人が現れたという言葉もあつた。もつとおもしろいことに、白隠や道元よりも、売茶翁の禅の方が米国社会にはなじむようだと言評されました。米国社会では、布施を得て修行するという禅寺の勤めはなかなか果たせません。日本にはない工夫が必要となり、普通の生活をしながら修行する在家禅の形をとるようになっていく。レストランやパン屋を営業する禅センターもある。売茶翁は米国人たちがつりいれている在家禅のモデルとして捉えられたのです。



出版する少し前に、ちようどりマンショックの後でもあったので、この本はリーマンショックで落ち込んだ人にぜひ贈ってあげるとよい、と書かれたことも（笑）。ひもじい生活でも、売茶翁のように乗り越えられるよ、と。

日本では、煎茶の神様として知られる売茶翁の生涯についての専門的な研究はこれからでしょう。事実、最近若い研究者が増えていると聞いています。このたびの本で、煎茶道の神様という側面だけではなくて、人間売茶翁、たとえば、なぜ彼が同時代の仏教界に批判的であったか——気ままに煎茶を売る生活を選んだのか、を考えました。中年期、三十から四十歳代頃までに、売茶翁は地元佐賀の龍津寺で寺務に携わっていました。理想が高く、修行をまだ続けたかったと思われる売茶翁は、先師化霧道龍に責務を果たしたところで、すみやかに地元の寺を出て、雲水のように一生漂泊の生活を送ろうと決心したらしい。その後の事情でやむをえず京都で茶売り生活を始めます。しかしその日常生活のなかで、禅の自由自在の境地に向かって修行を続けていたとみてもよいでしょう。晩年に、その悟りの境地に到達してから、初めて弟子をとりうと考えるのは、翁にとって自然なことだったと思います。

——今後、新発見はありそうですか
七十、八十歳代の資料の豊富さに
対して、六十歳以前の資料はまだ何

一つ見つけていません。六十歳代といっても、数通の書状しかありませんし、これからも、新しい資料はあまり期待できないと思います。しかし、晩年の偈頌や手紙ということになると、どんどん出てくると思いますよ。茶人などがもっているものや、古い蔵のなかとか。また、売茶翁の法弟大潮元皓と手紙を頻繁に交わしたはずなのに、大潮宛の書状は一通しか知られていません。それがどこかのお寺の蔵から出てくれば、売茶翁の京での生活はより明白になるでしょう。

また、肥前を出て関西に赴いた時から、売茶翁が大潮の友人たちのネットワークに期待することもあったと思われます。そのネットワークのメンバーの一人、泉州貝塚の松波（津田）治部之進については、本書のエピローグに記しました。売茶翁と大潮両人が六十歳、あるいはそれ以前から、治部之進と交流があったことを証明できますが、大潮が売茶翁を松波に紹介したかどうかという証拠はいまだ見つかっていません。それに関連して、京都の公家日野大納言資時という人物と売茶翁との関係は、翁の手紙から十分うかがわれますが、貝塚市の津田文庫に保存されている古文書に、領主下半家は日野家出自であったという記録があるとのことなので、その辺の状況はこれから明白にすることができるとでしょう。そうした知られざる関係資料を探しあて、売茶翁の実像にせまった研究をさらに深めていきたいと思っています。

（二〇一六年六月二日 於…三条京はやしや）

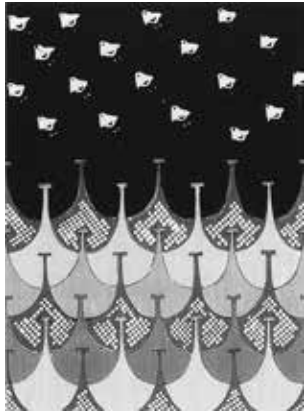
本づく り 温故知 新

本誌一〇〇号を記念して始まった連載第三弾。前号に引き続き、京都で活躍する、故くて新しい、本づくりの現場をご紹介します。

美術印刷文化のアーカイブ

うんそうどう
芸艸堂

木版摺りが美しい図案参考書『美術海』より



今回、ご紹介するのは、古書店や骨董店がたちならぶ寺町通と、二条通の交わるところに店舗をかまえる、創業明治二十四年（一八九二）の美術書出版社、とりわけ木版摺りの版元として知られる、「株式会社 芸艸堂」さん（以下、芸艸堂）です。知っていなければなかなか読めないこの社名の由来は、古来、虫よけに本にはさまれた香草の名前にちなみ、老舗の本屋から独立創業した山田直三郎が、富岡鉄斎に依頼し命名されました。同社は、古くから手摺り木版本の出版が盛んな京都で、その洗練された技術が継承され現在にいたっている、京都ならではの、そして日本唯一の出版社です。

伝統工芸としての木版印刷

木版摺り印刷には、おもに版木を彫る彫師、紙に摺る摺師、そして製本する経師という伝統的な職人の存在が不可欠だけでなく、その材料（版木の板や、摺るための紙など）も特殊なものを使用するため、材料の選定・制作（紙漉き）から出版にいたるまで、大変な労力・時間を要します。とりわけ多色摺りはその制作工程も複雑で、微妙な色合いを出すために、何度も版を重ねる必要があります。その加減は熟練の職人でなければ難しく、ほかし摺りは、一人前でなければ任せられないということです。しかも現在、京都で依頼できる彫師・摺師は減っており、その継承が喫緊の課題となっています。経師にしても、技術が途絶えないよう、現代的な素材で和綴じの豆本シリーズを販売するなど、製品企画にも心配りをされています。

謎に包まれた図案家たち

近代から戦前、京都では多色摺りの木版本が、一時隆盛をさわめました。その背景にあったのは、図案の需要です。それは、京都ならではの産業、呉服産業と密接なつながりがあります。呉服のデザインは、図



版木蔵の内部。版木は長く保存が可能であり、版木を包む新聞紙の日付で、前にいつ出版したかがわかる（！）。悠久のひと時を感じました。



『北斎漫画』の版木

案見本から選んで決められていましたが、その図案見本帖が、美しい多色摺りの木版本で、たくさん作られたのです。いくつかの図案集を見せていただきましたが、今みても斬新なデザイン……それもそのはず、それは当時、公募で選ばれた作品ばかりが集められている図案集でした。また大正四年（一九一五）は琳派三百年で沸いた年でもあり、神坂雪佳^{かみさかせつ}などによる琳派の復興ムーブメントがありました。こうした図案を描いた図案家たちの実態は謎に包まれているというところで、今後の研究・解明がまたれます。

版木アーカイブを現代にいかす

版木蔵をのぞかせていただくと、うす暗いなかから大量の版木が目飛び込んできました。十萬枚もの膨大な版木が古い新聞紙につつまれ一枚一枚収められており、なかには関東の版元から移された結果、災害や戦禍をまぬがれて残った貴重な版木もあります。たとえば『北斎漫画^{ほくさいまんが}』の版木（七一〇枚）も明治四十四年（一九一一）に東京の吉川弘文館から求版し、版木蔵に収められています。版画作品のみならず、こうした版木による印刷技術は海外でも関心をよび、最近では、フランスの美術館に収めるために浮世絵の版木が制作されたり、フランスの美術出版社から伊藤若冲^{じやくちゆう}の画帖が出版・紹介されました。

新しい製品も次々と生みだされています。昨年の琳派四百年の記念イベントでは、現代アーティストとコラボレーションした木版画作品が展示されました。最近では、若冲の生誕三百年にちなむ製品のラインナップが豊富です。また前述の図案は呉服産業の衰退とともに見本帖としての役割は終えたものの、今では新しい製品づくりの原動力となつて、書籍にとどまらず、建物内装やファッションデザインなどに見事にリメイクされ、よみがえっています。新旧の技術を織り交ぜながら印刷文化を下支えする芸艸堂さんの放つ、「故^{ふる}くて新しい」製品からは、今後目も離せません。

今回は和紙問屋の森田和紙さんをご紹介します。お楽しみに。

株式会社 芸艸堂

京都市中京区寺町通二条南入ル妙満寺前町459

☎075-231-3613

和食の基本は、だしにあり

後藤加寿子

私は京都生まれ、京都市育ち。懐石料理を指導していた母に料理を習い、家庭では「おまわり（お惣菜）」をいただき、京都の四季折々の旬の味を楽しんで成長した。その頃は日本中どこでも、だつたと思うのだが、家庭料理を作る際は、まず「だしをとる」ことが当たり前のことだった。結婚してからは夫の仕事の関係で日本の各地で暮らし、やがて関東に拠点を移し、その間、さまざまな味わいに接してきた。家族のために料理を作ることが楽しくて楽しくて、料理をお教える仕事が自然な形で徐々に始まっていった。

子どもが独立してからは本格的に料理研究家としての活動に取り組むようになったが、その時に、一番、大切にしたのは「おだし」のこと。私がお伝えしたいのは、京都の暮らしで培った家庭料理としての和食。おだしとほんの少しの調味料で、素材そのものの味をいただく料理である。料理サロンで教えたり、料理の本を上梓したり、またメディアの方々をお招きしての講演など、さまざまな形で、とにかく「だし」の理解をより深めたいと思って活動を行ってきた。だしのなんたるかを理解していただくことが、まず、私の料理をわかっていただく第一歩だとも思っていた。だし

をとることが、とかく「面倒」と思われがちな風潮ではあったが、決して手間ではないことや、おいしーだして作った料理の本当のおいしさを一人でも多くの方に知っていただきたいと思つてのことだった。

その頃、「食育」という言葉が流布してきて、私はまさに天啓を得る思いだった。「おだしのおいしさを、最もわかつてほしいのは、幼い子どもさんだ」ということである。

思い出すのは長女が生まれた時につぶやいた、母の言葉。ちょうどマクドナルドが日本に上陸した頃だった。「ケチャップの味に、日本の食文化がぶさされるかもしれへん」という言葉だった。母は決してケチャップ味を否定していたわけではない。そのおいしさも、ある意味では、わかつていた。ただ、子どもには、繊細な味をまず食べさせないといけない、濃い味を先に覚えると薄味が物足りなく感じてしまう。その逆は何とかなるが……、ということだったのだ。そしてこの薄味は、「おだし」がなくては成立しない。

小学校にあがる前のお子さんを料理サロンに招いたり、小学校

へ出前授業をしたり、さらにはお誘いを受けてフランスの「味覚の一週間」という政府主催の催しの一環で、パリの小学校やリセで「だしのおいしさ」について教えたり、私なりの「食育」活動を行っていった。食育の現場でいつも感動するのは、野菜のおひたしや季節の炊き込みご飯などに大喜びする子どもたちの歓声。地味な存在だと思っていた「だし」に對し、まるで遊園地のアトラクション経験さながらの反響なのである。参観していた保護者の驚く様も、また興味深かった。食育は親子揃って受けていただくのが何より、と、これは私の持論にもなっている。

先日、龍谷大学教授の伏木亨先生の「京のだし」についてのご本を拝読したが、先生のご研究を私なりに抜粋すると、「幼い時にだしの味を知っていると、その後の食生活がどのようなであれ、四〇代にはだしのおいしさに戻る」、「健康な食生活を営むためには、だしを再認識し、次代に伝えることが大切」ということであったように思う。これまで続けてきた「だし」に關しての食育活動に、思いもよらないエビデンスを示していただいたような気がして心強い限りであった。「やはり間違っていないかった」と、確信も抱けた。

二〇一三年に和食がユネスコの無形文化遺産に登録され、その保護・継承のために「和食文化国民会議」が設立されたが、その末席に選んでいたのは、私のこういつた活動を評価してくださったから、なのかもしれない。会議のメンバーは学者さんをはじめ錚々たる方々だが、「家庭料理を作る側」の一人として、私（そうそう）の意見を述べさせていただいている。このたび、「和食会議」

の活動の一環としてブックレット制作・刊行が始まり、私にも『おもてなしとマナー』執筆のご依頼をいただいた。このような大きなテーマをお引き受けて良いものか大いに迷ったが、会議の会長であり、国立民族学博物館名誉教授の熊倉功夫先生との共著という点でもあり、また、「今の日本の暮らしのなかで、私なりに実践してきていることを中心に書いていけばいい」と思い定め、筆をとることができた。「和食のもてなしとは」「和食のマナーとは」というテーマを、若い方でも納得して楽しく読んで実践していただける内容になったのではないかと感じている。

孫が通っている幼稚園の園長先生に、「鉛筆が持てる子は、お箸もちゃんと持てますね」と申し上げたところ、「いえ、逆ですよ」とおっしゃる。箸の持ち方ができている子は、鉛筆もきちんと持てるものなのだとか。ここでもまた、日本の食文化やマナーの大切さを実感した次第である。これからも、だしのおいしさを様々な形でお伝えし、さらに「和食」の魅力を広げていくお手伝いができれば、と願っている。

（料理研究家）

後藤加寿子 著

おもてなしとマナー

◎和食文化ブックレット—— 3

（詳細は31頁）



高野山の「箜篌」

高野山がどこにあるか、みなさんはご存知だろうか。時々、奈良県とまちがわれるが、和歌山県の東北部、伊都郡高野町に属する。もともと、高野町は奈良県に隣接しているので、それほど大きな誤りではない。「山」の字がつくが高野という山はなく、標高約八三〇メートルの山上の盆地の地名である。東西五・五キロ、南北二・二キロの範囲に、弘法大師空海廟のある奥之院、高野山のシンボルともいえる根本大塔^{こんぽんだいとう}などが建つ壇上伽藍^{だんじょうがらん}、総本山金剛峯寺のほか、幾筋かの通りに沿って、宿坊五二か院、数珠やごま豆腐などをあつかう商店が軒を連ね、周辺には民家が並ぶ。二〇〇四年に「紀伊山地の霊場と参詣道」として、ユネスコの世界文化遺産に登録され、昨年、開創一二〇〇年の節目を迎えた。

私はこうした高野山の一隅に今春まで住み、展示施設勤務のかたわら、自らの研究をまとめ、このたび拙著『箜篌の研究——東アジアの寺院莊嚴^{しょうごん}と絃楽器——』を上梓する。

「箜篌」とは、東アジアにかつて存在した絃楽器である。その実体は様々で、これまでの研究により、ハープ形の豎箜篌^{たて}、弓形のハープである鳳首箜篌^{ほうしゅ}、箏のような形をした臥箜篌^ががあったと

されているが、こうした名称の区別がなされるのは中国七世紀の文献『隋書』が初めてで、それ以前は単に箜篌と記されるのみであり、なかなか謎の多い楽器である。

さて、ほとけの住まう浄土の景観を描いた各種の「浄土変相」には、天衣^{てんね}をまとった多数の楽器が空中に浮いている様子が見えるが、これらは虚空に懸かり自然に鳴るといふ浄土の楽器を絵画的に表現したものと考えられる。

私の研究によると、こうした浄土の楽器を象徴した仏教建築の飾りが我が国に存在した。それは「箜篌」と呼ばれ、木製で、箏のような形をしており、仏堂や仏塔の軒下に宝鐸^{ほうたく}とともに懸けられていたらしい。その源をたどると、どうやら中国に行き着く。日本の寺院を飾る「箜篌」は、奈良時代の文献にすでに記されており、明治時代に至るまで見られたようだが、現在では失われてしまった。十五年ほど前、奈良岡寺で、再建三重塔の壁画完成にあわせ、和琴をかたどった青銅製の飾りが新たな試みとして軒下に懸けられたのが、「箜篌」があった風景をしのぶわずかなよすがとなっている。

中 安 真 理

今ではほとんど知られていないこの「箆篋」について、自分ごとりあげなければ忘れ去られてしまうという使命感めいたものを持ち、調査を続けてきた。その始まりは高野山の資料であり、また、高野山に住むことになったのも「箆篋」がきっかけだった。

大学院の修士課程に在籍中、室町から江戸時代にかけて成立した高野山参詣曼荼羅各本の図版を見ていて、壇上伽藍に建つ根本大塔の軒下に、宝鐸とともに、箆のような形をした飾りが描き込まれているのに気づいた。もしやと思い、それよりも早期に制作された「高野山水屏風」や高野山地蔵院本「高野大師行状図画」に描かれた根本大塔を調べると、そこにも同様の飾りが見つかった。

ある日のこと、外部の研究会に参加し、そこで知り合った方に何の研究をしているのかと聞かれ、高野山で調べたいものがある、と何気なく答えたところ、懇意にしている高僧がいると言って紹介してくださったのが、高野山大学を退官後、当時奥之院で維那の要職についていらした日野西眞定先生だった。日野西先生は多数の論考の中には、高野山参詣曼荼羅に関するものもあり、お話を伺いたいと常々思っていたので、偶然とはいえ驚いた。そのおかげで日野西先生にお目にかかることができ、資料調査も兼ねて高野山に通っているうちに、いつのまにか居着いていた。仏教には昔から心ひかれるものがあり、禅には親しんでいたのだが、まさか高野山で日々を送ることになるとは思いもよらなかった。

その後、研究を進めていく中で、高野山の根本大塔の飾りは、

「箆篋」と呼ぶべきもので、高野山以外にも多くの事例があることが判明した。一九三七年再建の現在の根本大塔にその面影はないが、さかのばれば「箆篋」が懸けられていたことは、各種の絵画資料からほぼ確実であったと私自身は考えている。

風の強い日には、よく根本大塔の下に立って、宝鐸の音を聞いていた。高さ約四八メートルの巨大な塔の庇には大ぶりの宝鐸が、最上部の相輪やそこから屋根の四隅に張られた鎖にはやや小さな宝鐸が懸かっている。それらが風に揺れると、案外大きな音がする。正直あまり情緒のない単なる金属音なのだが、それに耳を傾けつつ、往時、庇の宝鐸の隣にあったはずの「箆篋」の姿を思い描いた。

いつの日か仏教建築を飾る「箆篋」の復元ができたらと願い、協力してくださる方の出現を待ち望んでいる。その際には、できれば風に鳴る楽器ウインドハープのように、絃が風に共鳴して自然に音を出すしくみを取り入れ、この世の伽藍にも浄土の音を響かせてみたい。

(京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター特別研究員)

中安真理著

箆篋の研究

——東アジアの寺院莊嚴と絃楽器——

(詳細は24頁)

A5判・二八〇頁・六、〇〇〇円

世界のなかの神道研究

ジョン・ブリー

外国人による神道研究は早くも明治初年に始まっていた。イギリス人がその先頭に立ったことを（イギリス人の）筆者は誇りに思っている。重要なのはサトウ（E. Satow）、アストン（W. G. Aston）とチェンバレン（B. H. Chamberlain）だろう。彼らの神道研究は二一世紀の今でも読み応えがある。

幕末維新期に活躍した外交官のサトウは廃藩置県直後から「神道」に関心を示し、二本の優れた論考を執筆した。一八七二年に外国人として初めて伊勢神宮を訪れたサトウは、調査の結果を一八七四年に発表した。それは維新直後の神宮を知る貴重なエッセイである。そして翌年に賀茂真淵、本居宣長や平田篤胤の思想を「純粹神道の復活」と位置づける思想的論文も書いた。サトウの情報収集力、語学力は当時としては信じがたいものであった。どちらの論文も横浜のアジア協会（Asiatic Society）の紀要に載った。

アストンも外交官であったが、彼の主な業績は『日本書紀』の英訳だった。一八九六年に刊行をみた *Nihongi* は今でも（筆者をふくむ）学者に使われている。アストンが一九〇〇年前後に二

冊もの研究書（*Shinto: the way of the gods* と *Shinto: the ancient religion of Japan*）を出したこともまた彼の関心の高さを示している。外交官でなく、学者だったチェンバレンは早くも一八八二年に『古事記』の最初の英訳を完成していたが、神道を明治国家が創りあげた伝統として分析した *Invention of a new religion*（1912）はむしろ二一世紀の今注目を浴びる作品だろう。

大正から昭和前期を視野に入れていくと、英語圏の外国人だけが神道を研究したのではないことが分かる。確かに京都の神社や皇室儀礼に造詣が深いボンソンビー・フェイン（R. Ponsonby-Fane）（イギリス人）、国家と神社の關係に焦点を絞ったホルトム（D. C. Holton）やメイソン（J. Mason）（両者ともアメリカ人）は重要だが、他にドイツ人による研究活動が目立つ。神道のルーツを神話、古代史に探り、『古語拾遺』の独訳もしたフロレンツ（K. Florenz）や民族宗教として神道を位置づけ、戦前の神社問題も取り上げた京都在住のシラー（E. Schiller）、そして自身は「国家神道」に同情的だが、その神道と相容れない『倭姫命世記』^{ニギハヤヒのミコト}（中世神道の代表作）を独訳したハミツチュ（H. Hammitzsch）など

は時代状況にあわせた新たな関心事を披露していた。

第二次世界大戦後、海外においては（日本もそうだったが）神道研究は長いあいだタブー視されていた。神道が日本の超国家主義の原動力だったとされていたのが原因であった。そのタブーを破り、神道研究に新たな息を吹き込んだのは以下の三冊だったと思われるが、終戦後四〇年以上も待たなければならなかったことに気づく。

ハーデカー（H. Hardacre）は *Shinto and the state*（1989）で王政復古から戦後の靖国問題までを射程に入れて近代国家と神道との関係性を批判的に捉えた。それと関心事がまったく異なっていたのは、文化人類学者のネルソン（J. Nelson）の一連の研究。 *A year in the life of a Shinto shrine*（1996）は諏訪大社を政治から切り離し、諏訪の年中行事を軸に神職や氏子に焦点を絞った重要な研究である。筆者とテューウェン（M. Teeuwen）共編の *Shinto in history: ways of the kami*（2000）は、神道とは一体何かを吟味し、一つの神道が古代からあるのではなく、複数の「神の道」があった史実を示すことに狙いがあった。論文集の執筆者に、日本人の他にイギリス人、（アメリカ在住の）フランス人、（ノルウェー在住の）オランダ人、ドイツ人、オーストリア人などがいたことは、神道研究の新時代の開幕を意味したともいえる。

なお、筆者が常任理事、のちに副会長を務めていた神道国際学会の果たした役割についても一言触れておこう。同会はまさに海外における神道研究を奨励し支援するため一九九四年に設立をみ

たものである。宗教学者の一部や神社界で論争を呼び続けてきた神道国際学会だが、評価すべき業績を残したことは事実である。ロンドン大学（SOAS校）、カリフォルニア大学（サンタバーバラ校、ロサンゼルス校）、コロンビア大学、浙江大学などヨーロッパ、アメリカ、中国の大学に宗教研究センター、宗教講座、神道講座などの設立を支援し、神道研究を後押しして若手の研究者の育成にも貢献した。上に触れた *Shinto in history* の執筆者五人も同学会所属であった。

二一世紀に入って複数の海外の大学では、神道を見つめなおす動きが現れている。神道に関する本、論文などは未だ決して多くはないが、増えつつあることは確かである。考えてみればこのたび刊行された『変容する聖地 伊勢』は、外国人による神道研究の新しい成果ともみるべきだろう。筆者が編者として日本人だけでなく外国人をも同書の執筆陣に加えたのは、海外的な観点が日本の読者に刺激を与えると考えたからであった。

これからの神道研究は、日本人の研究者と外国の研究者が手を組んで、様々な観点から様々な時代を対象に、神道の葛藤に満ちた豊かな歴史を吟味していけば、素晴らしい成果が得られるだろう。『変容する聖地 伊勢』がひとつの叩き台となることを願う次第である。（国際日本文化研究センター教授）

ジョン・グリーン編

変容する聖地 伊勢

（詳細は29頁）

史料

探訪

(63)

任官雑例抄

長村祥知
(京都府京都文化博物館 学芸員)

京都市中京区、三条高倉に所在する京都府京都文化博物館は、美術・歴史・映像を活動の三本柱として、京都の歴史と文化を紹介する総合的な文化施設である。一九八八年の開館以来、京都府より委託を受けて、財団法人（二〇一三年より公益財団法人）京都文化財団が管理・運営を担っている。二〇一一年には「ほんまもん」を体感できる博物館へと大幅なりニューアルを行い、多様な特別展や、折々の企画にあわせて京都ゆかりの優品を紹介する総合展示を開催し、名作映画を上映している。

現在、京都文化博物館別館となっている旧日本銀行京都支店は、一九六八年から一九八六年まで、財団法人古代学協会が運営する平安博物館に用いられていた。この平安博物館旧蔵（および古代学協会所蔵）の文献資料について、しばしばお問い合わせを受けるので、まず簡単に紹介しておきたい。

財団法人（二〇一三年より公益財団法人）古代学協会が蒐集した文献資料は、いくつかの例外を除き、次の三種に大別される。

- ①現在も古代学協会が所蔵し京都文化博物館に寄託しているもの。
大島本源氏物語五三冊、七条しちじょう令解れいげ三幅、魚魯愚抄ぎょろぐしやう一〇冊等。

- ②現在も古代学協会が所蔵・管理しているもの。

定家筆じやうけはん兵範記へいはんき切一幅、経信卿つねのぶきやうき二冊、大和山陵図一卷等。

- ③平安博物館廃止の際に京都府に寄附され、京都文化博物館の所蔵品となったもの。

菊亭家文書（木箱入り）一件、持明院家文書（木箱入り）一件等。これらのうち、①②の古代学協会所蔵資料は、目録が同会の年報『初音』各号に掲載されている。また、①③は京都文化博物館の収蔵庫に収められており、調査・利用の際は時日に余裕をもつて照会して頂けるとありがたい。

なお、一九五一年に結成された古代学協会の中心的創立者は、洋の東西を問わず、考古学・文献学を総合して古代を解明する「古代学」を提唱した角田文衛氏つのだぶんゑいであり、平安博物館の館長も長くつとめておられた。「角田文衛氏所蔵文書」が『平安遺文』二四二・二八一九・三七一〇・四二五八・四五五〇・四六五七号として翻刻されているが、これらの原本は角田氏の個人財産だったのであり、古代学協会や京都文化博物館には伝来していない。

京都文化博物館の収蔵庫にある文献資料のうち、既述の①には

日本文学・日本史学の分野で有名な資料もあるが、未紹介のものや、現在の所在地が周知されていないものも多い。③についても同様である。幸い、いくつかの資料は、東京大学史料編纂所特定共同研究「九・十世紀古文書に関する史料学情報の総合化研究」研究代表者・山口英男）および科学研究費補助金基盤研究（S）「日本目錄学の基盤確立と古典学研究支援ツールの拡充」（研究代表者・田島公）によって、高精細写真を撮影して頂いたので、今後活用の幅を広げていきたいと考えている。

ここでとりあげる次の資料も、③の一つである。

任官雑例抄 一卷

卷子装。外題「古書」〔打付書〕。前欠。本紙縦二八・六cm、横一五三・〇cm（楮紙三紙）。軸長三〇・五cm。平安時代後期、安元二年（一一七六）書写。筆者中原師家。朱文長方印「月明莊」（卷末）。当資料は、箱書および「弘文莊在庫古書目録（弘文莊待買古書目）」第二五号（一九五五年）によれば、伊勢大神宮祭主藤波家もしくは広橋家の旧蔵という。

外題に「古書」とあり、尾題はなく、前欠のため内題も知りえないが、後世に付されたと思しい資料名が現在に引き継がれている。内容は、除目（諸官を任命する儀式）の次第であり、次頁図版のごとく文書の配置を図示したところもある。

（文首）

申兵部丞

諸司助

申式部録 近代多省奏

兵部録 勘解由主典 諸司二分堪事者

申左右衛門尉

成功者七八人已上撰入之、経帯刀・滝口居／衛府者、弓馬武勇者、重代之者、大□／成業者可為先、

（文尾）

置様

南

□ 申文御硯宮 御硯宮上又蓋積之

□ 闕官帳

□ 大間

安元二年四月十八日早旦、於綾小路壬生亭、以

正本 羽林相公御本、件本、
先年予依彼御口筆書之、書了、

直講中原師家

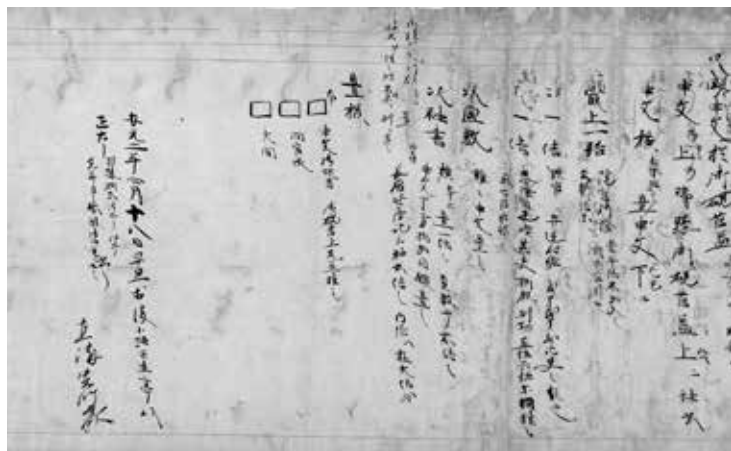
奥書に見える筆者の直講中原師家（のち師綱。一一四八～九二）は、いわゆる局務家の一流で師尚の男、永万元年（一二六五）正月から仁安元年（一一六六）正月まで大外記に在任していた（井上幸治『外記補任』参照）。

奥書には、先年、「羽林相公」の口筆により、師家が正本を書いた、その正本を綾小路壬生亭で書写したのが当資料だとある。

このときの「羽林相公」、すなわち近衛の官を帯する参議に該当する者は、徳大寺家の藤原実家・実守の兄弟であるが、実守であろうか。九条兼実の日記『玉葉』安元元年七月廿八日条に、改元定の際の実守の発言に対して「今羽林相公有『嗜文之聞』（今

羽林相公、文を嗜むの聞こえあり」とある。

当資料は平安時代後期の自筆資料であり、当時の除目の作法や任官の実態、中原師家と藤原実守の関係等、様々な点で興味深い。



「任官雑例抄」文尾部分（京都文化博物館所蔵）

京都文化博物館

・住所 〒604 8883 京都市中京区三条高倉

TEL 075-1222-0888
FAX 075-2222-0889

ホームページ <http://www.bunkakok.or.jp/>

・開館時間 総合展示 午前10時～午後7時30分
特別展 午前10時～午後6時

*毎週金曜日は午後7時30分まで夜間開館
(入場はそれぞれ閉室30分前まで)

・入館料 一般500円 大学生400円 高校生以下無料

*20名以上の団体は2割引 *特別展は別途料金が必要です

・休館日 月曜日(祝日は開館、翌日休館) / 12月28日～1月3日

*展示ごとに休室日を設けることがあります

総合展示

ものがたる染織文化財

2016年6月11日(土)～2016年8月7日(日)

洛陽三十三所2―縁起と尊像―

2016年6月11日(土)～2016年8月7日(日)

祇園祭―山鉦巡行の歴史と文化―

2016年7月2日(土)～2016年7月31日(日)

世界考古学会議京都(WAC8)開催記念

アートと考古学展―物の声を、土の声を聴け―

2016年7月23日(土)～2016年9月11日(日)

特別展

タリ版画展―もうひとつの顔―

2016年7月9日(土)～2016年9月4日(日)

— MEMO —

書評・紹介一覧 2～4月掲載分		※(評)…書評(紹)…紹介(記)…記事〔敬称略〕
京都 実相院門跡 (紹)「中外日報」2/26	日記・古記録の世界 (記)「日本経済新聞」2/13	
近世京都近郊の村と百姓 (評)『ヒストリア』254号(加納亜由子)	日本中世の領主一揆 (評)『史学雑誌』125編4号(海津一郎)	
近代日本〈陳列所〉研究 (評)『日本歴史』815号(伊藤真実子)	年中行事とときたり (紹)「中日新聞」4/14	
近代日本の都市社会政策とマイノリティ (評)『日本歴史』814号(町田祐一)	俳句とスペインの詩人たち (紹)『AMICS』No.106	
禁裏・公家文庫研究 (記)「日本経済新聞」2/13	響きあう東西文化 (評)『LOTUS』No.36(大久保美春)	
在京大名細川京兆家の政治的研究 (紹)『史林』99巻2号	仏教美術を学ぶ (紹)『ARAN with shin-nyo』vol.4	
正倉院の香葉 (紹)『AROMA RESEARCH』No.65	前野良沢 (紹)『日本医史学雑誌』62巻1号	
住友の歴史 (評)『経営史学』50巻4号(畠山秀樹)	万国博覧会と人間の歴史 (紹)「週刊読書人」2/5	
角倉一族とその時代 (評)『交通史研究』88号(山根伸洋)	(記)「読売新聞」3/30	
戦国大名権力構造の研究 (評)『ヒストリア』254号(菊池浩幸)	ミシンと衣服の経済史 (評)『社会経済史学』81巻4号(佐々木淳)	
和食とは何か (紹)「日本農業新聞」2/7	室町幕府の東国政策 (評)『歴史学研究』941号(植田真平)	
(紹)『日本家政学会誌』67巻3号	天下人の神格化と天皇 (評)『日本史研究』643号(深谷克己)	

4月から6月にかけて刊行した図書

図 書 名	著 者 名	ISBN978-4-7842	本体価格	発行月
記念植樹と日本近代	岡本貴久子著	1843-1 C3021	9,000	4
花道の思想	井上治著	1839-4 C1070	1,800	4
陽明文庫蔵舞絵〔舞楽散楽図〕・法隆寺旧蔵箆鼓	上野学園大学日本音楽史研究所編	1804-2 C3073	2,700	4
日光東照宮の成立〔オンデマンド版〕	山澤学著	7004-0 C3021	8,500	5
織豊期の茶会と政治〔オンデマンド版〕	竹本千鶴著	7007-1 C3021	9,500	5
元三大師御籤本の研究〔オンデマンド版〕	大野出著	7008-8 C3014	4,000	5
対外関係と文化交流〔オンデマンド版〕	田中健夫著	7009-5 C3021	13,800	5
翁の生成〔オンデマンド版〕	金賢旭著	7010-1 C3014	5,000	5
変容する聖地 伊勢	ジョン・ブリー編	1836-3 C1021	2,800	5
日本近世貨幣史の研究	安国良一著	1848-6 C3021	6,800	5
江戸時代唐船による日中文化交流〔オンデマンド版〕	松浦章著	7011-8 C3022	9,800	6
平安期の願文と仏教的世界観〔オンデマンド版〕	工藤美和子著	7014-9 C3015	7,400	6
明治前期の教育・教化・仏教〔オンデマンド版〕	谷川穰著	7015-6 C3021	7,500	6
平氏政権の研究〔オンデマンド版〕	田中文英著	7016-3 C3021	9,800	6

4月から6月にかけて刊行した継続図書

シ リ ーズ 名	配本 回数	巻数	巻タイトル	ISBN978-4-7842	本体価格	発行月
園城寺の仏像	1	1	智証大師篇	1765-6 C3071	12,000	4
大手前大学比較文化研究叢書	12	12	江戸文化が甦る	1847-9 C3070	3,800	5
和食文化ブックレット	3	3	おもてなしとマナー	1846-2 C1077	900	5
和食文化ブックレット	1	1	和食とは何か〔2刷〕	1825-7 C1077	900	6

(表示価格は税別)

▼少子化の中で、出版社はいかに知的発見を提供できるのか。書物の力が試されていく中で、一体なにができるのかを思考中。(一)

☆二〇一六年刊行図書目録刊行

ご希望の方はお電話、ファックス、またはメールで、ご連絡下さい。お送りいたします。

☆小社商品は書店だけでなく、左記の美術館・博物館等のミュージアムショップでも販売しております。展覧会等にお出かけの際には是非ミュージアムショップもご覧下さい。

東京国立博物館・国立西洋美術館・奈良国立博物館・京都国立近代美術館・五島美術館・長崎歴史文化博物館 ほか

☆フェア情報

左記書店にて歴史書懇話会ミニフェアを開催中です。出品銘柄は毎月更新しています。

- ・TENDO八文字屋 (山形県天童市)
- ・紀伊國屋書店新潟店 (新潟県新潟市)
- ・今井書店グループセンター店 (鳥根県松江市)
- ・芳林堂書店高田馬場店 (東京都新宿区)
- ・ジュンク堂書店三宮駅前店 (兵庫県神戸市)
- ・喜久屋書店阿倍野店 (大阪市阿倍野区)
- ・ジュンク堂書店上本町店 (大阪市天王寺区)
- ・今井書店出雲店 (鳥根県出雲市)
- ・ジュンク堂書店ロフト名古屋店 (名古屋市中区)

▼ワデル先生のインタビューを終えて、売茶翁の引方に、ひきずられつばなし。このまま京都にいれば、私もいつかは……!? また、芸艸堂取材にご対応いただきました、早光様、井上様に、この場を借りて感謝申し上げます。

▼『変容する聖地伊勢』のカバーは本の中身を表現すべく『変容するカバー』がテーマです。どういう意味か? ぜひ書店でみて下さい。(M)

▼開国後の日本見聞録は数あれど、インタビュー録は余りないのでは。この人はこんな事を考えていたのか、と新鮮な1冊です。詳細は30頁にて (m)

▼「紙を上手に扱えるようになったら一人前」と言われましたが、これがホントに難しい。分厚い原稿と日々格闘しております。(理)

▼目下、左京区百万遍の旧事務所の整理をしています。昔の資料をみると「出版」の意味のさま変わり——良い悪いではなく——実感します。(h)

▼アマゾンマーケットプレイスへの小社刊行図書の出品を始めました。これで在庫切れ表示が減っていきます。ご活用ください。(江)

▼ラグビー熱は冷めていません。いや、むしろ加熱する一方です。80分の死闘を繰り広げる熱き漢たちから目を離せません!! (き)

▼表紙図版・木村孔陽『売茶翁茶器図』部分(文政六・一八三三年刊、一九二四年再版)『売茶翁の生涯』より)

■定期購読のご案内■

『鴨東通信』は年4回(4・7・9・12月)刊行しております。

代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛お申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください。

おうとうふうしん

鴨東通信 四季報 No.102

2016(平成28)年7月12日発行

発行 株式会社 思文閣出版

〒605-0089

京都市東山区元町355

tel 075-533-6860

fax 075-531-0009

e-mail pub@shibunkaku.co.jp

http://www.shibunkaku.co.jp

表紙デザイン 鷺草デザイン事務所

茶の湯・民芸・食文化など、文化史の諸領域にわたる著者の広範な業績を全7冊にまとめる

熊倉功夫著作集 全7巻

平成28年（二〇一六）7月より隔月に刊行

■ A5判・各巻平均四五〇頁

本体価格（各）七、〇〇〇円



伝統とは、美とは、日本とは——文化史の諸領域にわたり茶の湯を軸として、鋭敏な感覚で鮮やかに本質を明らかにし、分野を軽々と飛び越えて新たなパースプクティブを示し続けてきた著者が、自選によってまとめる七つの小宇宙

〔全巻構成〕

第1巻	茶の湯—心とからだ—	平成28年（二〇一六）	7月刊行
第2巻	茶の湯と茶人の歴史		9月刊行
第3巻	近代茶道史の研究		11月刊行
第4巻	近代数寄者の茶の湯	平成29年（二〇一七）	1月刊行
第5巻	寛永文化の研究		3月刊行
第6巻	民芸と近代		5月刊行
第7巻	日本料理文化史		7月刊行

〔著者略歴〕

一九四三年 東京生まれ

一九七一年 東京教育大学文学部博士課程修了単位取得退学
京都大学人文科学研究所助手（七七年より講師）

一九七八年 博士（文学）の学位を取得
筑波大学助教授（八九年より教授）

一九九二年 国立民族学博物館教授
第一研究部長・民俗文化研究部長を歴任

二〇〇四年 国立民族学博物館名誉教授
林原美術館館長（一二年）

二〇一〇年 静岡文化芸術大学学長（一六年）
農林水産省食料・農業・農村政策審議会議長（二二年）

二〇一二年 日本食文化のユネスコ無形文化遺産推進協議会議長
のち一般社団法人和食文化国民会議会長（現在まで）

二〇一三年 茶の湯文化学会会長（現在まで）

二〇一六年 MITHO MUSEUM館長（現在まで）
静岡文化芸術大学名誉教授



花道の思想

井上治著

〔4月刊行〕

「花道の思想」を紐解くべく、第一部では歴史の流れを概括しながら「出生」(草木の自然な形姿「花矩」(人為的な意匠)「修行」(挿花を通じての求道)という観点で「花道思想の構造」を整理。第二部では、古くから挿花と密接に結びついていた宇宙像が江戸末期に揺れ動き、花道思想にどう影響したかをみた後、近代の花道家が新たな社会・文化・学術的環境の中で、花道文化の伝統とどう向き合ったのかを「風流」と「芸術」に注目して考察。花道思想の構造と、その近代における変容をみることで、日本の挿花文化の背後にある思想と、今日の挿花文化の位置に迫る。

- 序 文 (倉澤 行洋)
- ……第一部 花道思想の構造……
- 第一章 出生論 (縮景の思想／写生の思想／矯正の思想)
- 第二章 花矩論 (しんの思想／道具の思想／三才の思想)
- 第三章 修行論 (稽古の思想／工夫の思想)
- ……第二部 近代と花道思想……
- 第四章 花道と「宇宙」(天円地方／紅毛の天学／花矩と人倫)
- 第五章 花道と「風流」(明治の花／風流と自然)
- 第六章 花道と「芸術」(自由花運動／芸術と宗教／近代と求道)



▼四六判・二六〇頁／本体 一、八〇〇円

いのうえ おさむ：一九七六年、大阪府生まれ。京都大学文学部卒業、同大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)。現在、京都造形芸術大学准教授。花道研究会「北白川会」主宰。

京都実相院門跡

企画 京都府京都文化博物館

京都府歴史資料館

建築・庭園・絵画・彫刻・文学・史料——それぞれの専門家がその深遠な世界をご案内

「カラー図版」障壁画・杉戸絵／大雲寺絵図／京引御殿御指図／木造不動明王立像／如来荒神像／『仮名文字遣』ほか収録



内 容

- 総論 洛北岩倉と実相院門跡 (宇野日出生・京都市歴史資料館)
- 第一章 構造のけしき 貴族邸宅の遺構 (日向進・京都工芸繊維大学名誉教授)
- 第二章 空間のよそおい 門跡寺院特有の庭 (今江秀史・京都市文化市民局)
- 第三章 美のしつらい 実相院の襖絵 (奥平俊六・大阪大学大学院教授)
- 第四章 信仰のかたち 不動明王立像をめぐる (井上二穂・同志社大学文学部教授)
- 第五章 文事のせかい 洗練された教養・風雅な生活 (廣田収・同志社大学文学部教授)
- 第六章 史料のかたり 中世の実相院と大雲寺 (長村祥知・京都文化博物館)
- 大雲寺力者と天皇葬送 (西山剛・京都文化博物館)
- 門跡の生活 (佐竹朋子・柳沢文庫)

年譜 実相院門跡

【2月刊行】

▼B5判・一四四頁／本体 二、〇〇〇円

内 容

江戸文化が甦る

トロンコワ・コレクシヨンで読み解く琳派から溝口健一まで
大手前大学比較文化研究叢書12

石毛弓・柏木隆雄・小林宣之編

〔6月刊行〕

知られざる江戸版本、浮世絵の宝庫トロンコワ・コレクシヨン
をテーマに、近世美術から近代映像作品を対象として、多彩か
つ重厚な論を全文日仏両語で収録する。二〇一四年から続く大
手前大学日仏文化交流シムボジウムの集大成。

I トロンコワ・コレクシヨンをめぐって

装飾芸術美術館付属図書室の日本コレクシヨンに見る

トロンコワ、ルボーディ寄贈品について〔ロール・アベルシル〕

トロンコワ旧蔵の山東京伝『近世奇跡考』の草稿本

宗達のグラフィック・デザインにおける「無常」〔クリストフ・マルケ〕

立ち美人の居るところ

〔松尾芳樹〕
〔柏木加代子〕

II トロンコワ・コレクシヨンの周辺

フェリシアン・シャレー「図入り日本」と

ジャポニスムと琳派・装飾再考 エマニュエル・トロンコワ 〔柏木隆雄〕

日本のトンボとヨーロッパのトンボ「エマニュエル・シュヴァルツ」

肌を描く絵 「レジス・ミシエル」

III 日本の近代美術と現代アート

創作について

私の作品について

私の立ち位置

絵画

シムボジウムを総括して

〔マリールカトリヌ・サユット〕



▼A5判・三九六頁／本体三、八〇〇円

一九二〇年代東アジアの文化交流

川本皓嗣・上垣外憲一編 大手前大学比較文化研究叢書6
海外交流が新たな展開を見せた一九二〇年代の東アジア文化交流の様相を、
当該各国の研究者を結集することによって明らかにする。

▼A5判・二二二頁／本体二、八〇〇円

一九二〇年代東アジアの文化交流II

川本皓嗣・上垣外憲一編 大手前大学比較文化研究叢書7
未開拓な部分が多い一九二〇年代の東アジアの文化交流の様相を解明する第
二弾。演劇・詩歌・文芸などをテーマに東アジアを総観する。

▼A5判・二七四頁／本体二、五〇〇円

一九三〇年代東アジアの文化交流

上垣外憲一編

大手前大学比較文化研究叢書9

世界恐慌のため鎖国経済化が進み満洲事変を皮切りに世界大戦へと発展する
時代。戦争の影で見落とされがちな当時の文化交流を様々な視点から論じ
る。

▼A5判・二五八頁／本体二、八〇〇円

日仏文学・美術の交流

「トロンコワ・コレクシヨン」とその周辺

大手前大学比較文化研究叢書10

石毛弓・柏木隆雄・小林宣之編

明治期に日本で蒐集されたコレクシヨンを柱に、日仏美術の交感を論じる。

▼A5判・二八四頁／本体二、八〇〇円

日仏マンガの交流

ヒストリー・アダプテーション・クリエイション

大手前大学比較文化研究叢書11

石毛弓・柏木隆雄・小林宣之編

マンガ／バンド・デシネ文化について、特徴・受容・翻訳などの視点から考察。

▼A5判・二八六頁／本体二、八〇〇円

俳句とスペインの詩人たち

マチャード、ヒメネス、ロルカとカタルーニャの詩人

田澤佳子 著

【1月刊行】

これまでの研究では、俳句はフランスなどでの広範な流行にかなり遅れて、断続的にスペインに入ったと考えられていた。だが、陸続きのヨーロッパでそのようなことはあり得ない。スペイン語とカタルーニャ語に精通する著者が、俳句という究極の短詩がいかに受容されたかを、当時の文学書はもとより雑誌や新聞、詩人たちの日記や書簡などを渉猟して、こまやかに読み解く。

序 章 バスの功罪

第一章 俳句受容の玄関口

パリのスペイン詩人たち／ロンドンとスペイン詩人

第二章 スペインの三大詩人と俳句

アントニオ・マチャード／ファン・ラモン・ヒメネス／フェデリコ・ガルシア・ロルカ

第三章 俳句伝播の拠点「学生寮」

知の最前線としての学生寮／学生寮の母体／俳句と学生寮周辺の人々

第四章 「ウルトラリスモ」と「グレゲリア」の役割

「ウルトラリスモ」とは／「ウルトラリスモ」と俳句／ラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナと「グレゲリア」

第五章 カタルーニャの詩人・文化人と俳句

カタルーニャ語の位置づけ／ハイカイの紹介者ジュゼップ・カルネー／アウジェニ・ドルスの役割／ジュゼップ・マリア・ジュノイと「ハイカイ」／カタルーニャの国民的詩人ジュアン・サルバトール・ババサイット

▼A5判・三五二頁／本体五、〇〇〇円

たざわ・よしこ……一九五七年兵庫県生。大手前大学大学院比較文化研究科比較文化専攻博士課程後期単位取得退学。文学博士。大阪大学・関西大学講師。



没理想論争とその影響

坂井 健著

佛敎大学研究叢書27

明治二四年以降、『早稲田文学』と『しがらみ草紙』を舞台に坪内逍遙と森鷗外との間で繰り広げられた「没理想論争」を軸に、明治の文学者たちがイデオロギーと現実との関係をどのように捉えようとしたのか、またこの論争が文学史にどう影響したのかをたどる。

【2月刊行】

▼A5判・三七四頁／本体八、九〇〇円

「内容」

第一部 没理想論とその時代………

没理想論成立のころ…宗教の混乱とユニテリアン／「真理」の時代…二葉亭・逍遙・嵯峨の屋など

第二部 世界観と認識論の対立………

二葉亭四迷「真理」の変容…仏教への傾倒／没理想論争の実相…観念論者逍遙と経験論者鷗外／没理想論と老荘思想／没理想論争と仏教／シユウエーグラ「西洋哲学史」と没理想論争

第三部 揺れていた「想」………

観念としての「理想(想)」…鷗外「審美論」における詠語の問題を中心に／「月草」における改稿の意図…逍遙子の諸評語…における異同をめぐって／没理想論争の発端…斎藤緑雨と石橋思案の応酬をめぐって／没理想論争の背景…想美論の中で

第四部 没理想論争の影響………

高瀬文淵と森鷗外…「超絶自然論」と「脱却理想論」を中心に／没理想論争と田岡嶺雲…禅の流行と自然主義の成立／没理想論争と田山花袋…「野の花」論争における「審美新説」受容の評価をめぐって／田山花袋と高瀬文淵…花袋のハルトマン受容をめぐって／鷗外の具象理想美学とその影響…日清戦争後の文壇と花袋………

第五部 鷗外とハルトマン………

没理想論争における鷗外とE・V・ハルトマン／鷗外がハルトマンを選んだわけ…森鷗外「審美論」と本保義太郎筆録「美学」ノートの鷗外のサビ精神…本保義太郎筆録「美学」ノートの独自性

さかい たけし……一九六二年新潟県生。筑波大学大学院文学・言語研究科単位取得中退。同大学文芸・言語研究系助手などを経て、佛敎大学文学部教授。

平安王朝の葬送 死・入棺・埋骨

臈谷 寿著

【2月刊行】

◎本書では、日本古代撰・院政期の天皇（桓武・安徳天皇）と貴族の葬送儀礼における具体相をさぐり、その相違点を考察する。

◎数次におよんだ国際日本文化研究センターでの共同研究「公家と武家」における報告・論文を中心にとまとめ、新稿「院政期の天皇」を収録。

◎平安王朝の死、入棺、葬送、埋骨の様相を通覧することから、皇権の在り方を考える。

◎土葬から火葬への変遷が一覧できる表を付載。

◆目次◆

第一章 撰関初期の天皇の葬送

桓武・仁明天皇／文徳・醍醐天皇
／朱雀・村上天皇

第二章 撰関盛期の天皇の葬送

冷泉・円融・花山天皇／一条・三条天皇／後一条天皇／後朱雀・後冷泉天皇

第三章 院政期の天皇の葬送

後三条・白河・堀河天皇／鳥羽・崇徳・近衛天皇／後白河天皇／二条・安徳天皇

第四章 貴族の葬送

九世紀の状況／一〇世紀の状況／一一世紀前半の状況／一二世紀後半の状況／一二世紀前半の状況

▼四六判・三〇四頁／本体三、七〇〇円

おぼろや・ひさし……一九三九年生。同志社女子大学名誉教授。



栄花物語・大鏡の研究 山中裕著

『栄花物語』『大鏡』に内包される歴史書としての特徴を考究。従来からの歴史物語という分野に収まりきれない可能性を提示する。

▼A5判・四〇四頁／本体七、二〇〇円

平安時代陰陽道史研究 山下克明著

陰陽道の成立・展開期である平安時代を中心に、宗教としての陰陽道のあり方、陰陽師たちの活動の実態などさまざまな角度から明らかにする。

▼A5判・四六〇頁／本体八、五〇〇円

日本古代の武具

近藤好和著

『国家珍宝帳』と正倉院の器仗をそれぞれ詳細に解説し、図版編には正倉院器仗を中心に多数の器仗を収録。日本古代の器仗を理解するための基本図書。

▼A5判・四七〇頁／本体八、五〇〇円

奈良朝人物列伝『続日本紀』薨卒伝の検討 林陸朗著

『続日本紀』には王臣・僧侶等の死没記事に、人物略伝を掲載することがある。本書はこの薨卒伝54件の現代語訳・訓読・原文・語句解説・考察で構成。

▼A5判・四六八頁／本体七、〇〇〇円

訓讀註釋 儀式 踐祚大嘗祭儀 皇學館大学神道研究所編

大嘗祭の全貌を示す、最も古い確かな文獻『儀式』（貞観儀式）。本書は、皇學館大学神道研究所が長年に亘り取り組んできた訓読・注釈研究の成果。

▼B5判・八九〇頁／本体一五、〇〇〇円

箏篋の研究

— 東アジアの寺院荘厳と絃楽器 —

中安真理 著

【7月刊行予定】

浄土では自然と音楽が湧きおこり、仏の功德を謳っている——
寺院においてその音楽を象徴したのが、建築物に飾られた楽器である。
長く仏教建築を荘厳しながらも今では廃れてしまった絃楽器「箏篋」。
中国・日本の文献を博捜し、その実態を明らかにする。

序章

コト形絃楽器とは／風で鳴るコト形絃楽器「ウインドハープ」／箏篋三種／本書の構成

第一章 浄土の音

風で動いて鳴るもの／自然に鳴るもの／自然に鳴る箏篋／箏篋の特殊性／美術作品にみる自然に鳴る音楽の表現

第二章 日本の美術作品にみる箏篋

堅箏篋／風首箏篋／金剛空箏

第三章 臥箏篋—日本の仏教建築を荘厳するコト形絃楽器の源流—

先行研究／箏篋の発生／箏篋の形態／フレットをもつコトの図像資料／文献史料にみるフレットをもつコト／朝鮮半島の玄琴の起源

第四章 日本における箏篋の漢字表記と雅楽寮での使用

漢字表記と助数詞による区別の有無／雅楽寮での使用

第五章 仏教建築を荘厳する「箏篋」の資料分析

文献史料にみる「箏篋」／美術資料にみる「箏篋」／考古資料にみる「箏篋」——鳥羽離宮跡出土コト形木製品——

第六章 中国・日本における「風琴」「風箏」

中国の詩文にみる「風琴」「風箏」「風箏」は風か／唐代の史料にみる「風箏」／日本における「風箏」

第七章 仏教建築を荘厳する宝鐸の存在と音の意義

「鐸」の字義／インドの宝鐸／中国の宝鐸とその音／自鳴する様々な体鳴楽器の音の意味／浄土の宝鐸／日本の宝鐸と鐘

▼A5判・二八〇頁／本体六、〇〇〇円

なかやす・まり：一九七一年生。高野山霊宝館学芸員を経て、京都市立芸

術大学日本伝統音楽研究センター特別研究員。

陽明文庫蔵舞絵(舞楽散楽図)・法隆寺旧蔵拵鼓

上野学園大学日本音楽史研究所編 日本音楽史料叢刊1

日本音楽史学の中核的拠点、上野学園大学日本音楽史研究所創設以来40年にわたる研究の蓄積と成果を踏まえた影印叢刊。

【5月刊行】

▼A4判横綴・二五六頁／本体二、七〇〇円

天皇・將軍・地下楽人の室町音楽史

三島曉子 著

天皇家・將軍家の笙の御師範として重要な役割を果たした地下楽人豊原氏の南北朝期から約一五〇年にわたる活動に着目し、権威に密接にかかわった音の文化を論じる。

▼A5判・三六〇頁／本体六、六〇〇円

古楽古歌謡集

陽明叢書国書篇 第8輯

土橋寛・岸辺成雄・福島和夫他解説

藤原氏嫡流である近衛家の陽明文庫の中から古楽と古歌謡の資料を選び、専門家諸氏の解説を得て写真製本として公開。

▼菊判・三〇四頁／本体一一、八〇〇円

神霊の音ずれ

太鼓と鉦の祭祀儀礼音楽

朱家駿 著

祭祀儀礼の音をさぐるフィールドワークと象形文字に発した古代漢字(音・楽・鼓など)の分析を重ね合わせることで神霊と音のさまざまなすがたを明かす。

▼A5判・一九六頁／本体三、五〇〇円

正倉院宝物と古代の技

木村法光 著

長年、正倉院事務所保存課に勤務し、正倉院宝物の調査・研究、保存・管理に携わってきた著者の研究成果を一書にまとめる。

▼A5判・五二二頁／本体一五、〇〇〇円

日本近世貨幣史の研究

安国良一著

近世貨幣はどのように生まれ、流通し、終焉をむかえたのか。

日本の歴史上、近世ほど多種類の貨幣が流通した時代はない。金・銀・銭という幕府制定の「三貨」、近世初頭の大名領国にみられる金銀貨「領国貨幣」、藩札や私札の紙幣などを加えればその数は膨大である。さらに銭については、地域独特の数え方もあった。こうした複雑さの一方、近世の権力は貨幣制度を確立したとも認識されている。本書はこの一見矛盾する貨幣の特質を明らかにすることを試みる。一國一通貨という貨幣観を解きほぐし、その独自の機能や意味づけを問うおもしろ著。

序章	課題と方法
第一章	貨幣の統合と多様性
第二章	三貨制度の成立
第三章	貨幣の地域性と近世的統合
第四章	地域からみた近世中後期の通貨事情(一)―播磨を中心に―
第五章	貨幣改鑄と新旧貨引替機構
第六章	金銀貨の機能とその展開
第七章	近世初期の撰銭令と錢貨の機能
第八章	貨幣の社会的・文化的効用
第九章	寛永通宝の鑄造と流通
第十章	寛永通宝の第一次鑄造
第十一章	享保期、大坂難波錢座の鑄銭
第十二章	真鍮四文錢の鑄造と流通
終章	まとめと展望

やすくに・りょういち…一九五三年生。京都大学博士(文学)。現在、住友史料館副館長

【6月刊行】

▼A5判・三二〇頁／本体六、八〇〇円

近世大名のアーカイブズ資源

松代藩・真田家をめぐって

国文学研究資料館編

松代・真田家に伝来した七万数千点に及ぶ多様な文書類は、支配・政治・経済・産業・文化・文芸など多岐に亘る内容を有し、過去はもとろろ現代・未来を語る上でも欠かせない第一級のアーカイブズである。本書は、真田家のアーカイブズを中心に、藩庁の全体構造や各部署の機能などについて、記録管理の観点から分析を試みたはじめての実践的な研究成果である。

アーカイブズ資源研究の動向と課題 (大友一雄)

第1編 藩庁の組織構造と記録管理

松代藩・国元における行政組織とその場 (原田和彦) 家老職における執務記録の作成と保存 (太田尚宏) 真田家文書からみる松代藩組織構造と「物書」役 (宮澤崇士)

第2編 藩庁と藩庁外の記録管理システム

江戸における大名課役をめぐる引継文書と藩政文書 (岩淵令治) 糸会所の記録作成・授受・管理と機能 (西村慎太郎) 松代城下町町人地の行政情報蓄積様式にみる家と組織 (渡辺浩一) 松代藩代官文書の管理と伝来について (種村威史) 官僚制機構の末端としての村 (福澤徹三)

第3編 大名家伝来文書群と記録管理

幕府老中職文書群に関する基礎的研究 (大友一雄) 松代藩御納戸役の職掌と記録管理 (降幡浩樹) 藩主生母の格式をめぐる意志決定の史料空間 (福田千鶴)

第4編 伝来と管理

真田家印章の使用と伝来 (山中さゆり) 真田宝物館所蔵真田家文書の管理と容器の特質 (工藤航平)

【3月刊行】

▼A5判・四〇八頁／本体七、〇〇〇円

江戸後期儒者の

フィロロギー

原典批判の諸相とその国際比較

竹村英二著

【3月刊行】

江戸時代後期／幕末の日本では高度な考証的学問が発展した。それを担ったのは「市井」の儒者たち。彼らのこうした属性は、同時代中国の考証学者の多くが政治・社会的環境と相即不離な状況にあったのと異なり、近代の学問の基本である客観性と実証性を備えた、既成思想に束縛されない学究活動を可能とした。これは少なくとも十八世紀という時空においては世界史上きわめて稀有なものであった。

日本における実証的学問の成立は清朝考証学と近代の西洋体験を基盤とする、こうした所論は再考を余儀なくされるのである。

総論編

序 本書の中心的課題、ならびにその射程
第一章 江戸中／後期における漢学学問方法の発展

各論編Ⅰ 古典テキスト研究の諸相

第二章 十八世紀日本儒者の「尚書」原典批判
第三章 東條一堂の「論語」研究
第四章 久米邦武と「尚書」研究
第五章 思考様式醸成要素としての
儒学テキスト読解の作法



各論編Ⅱ 古代言語への意識／接近

第六章 太宰春臺における古文の「體」「法」重視
第七章 理解力・翻訳力・外国語習熟力
結論 日本儒学における考証学的伝統と原典批判

▼A5判・二五六頁／本体五、五〇〇円

たけむら・えいじ：一九六二年生。豪メルボルン大卒。英ロン
ドン大大学院修了。現在、国士館大学教授。

在村知識人の儒学

川村肇著

近世後期の在村知識人の姿を具体的な事例によってその諸相をとりあげ、民衆の儒学が教育の近代化とどう関わっていたかを探索。

▼A5判・二七八頁／本体六、四〇〇円

近世儒者の思想挑戦

本山幸彦著

林羅山・熊沢蕃山・貝原益軒・荻生徂徠・松平定信・佐久間象山・横井小楠……近世の思想家たちが意図したことを明らかにする日本思想史の基本書。

▼A5判・三一四頁／本体七、五〇〇円

熊沢蕃山の思想冒険

山田芳則著

著作から思想構造と、その変化の意味を問う。また中江藤樹『翁問答』や池田光政の藩政改革をとりあげて、多様な蕃山の思想を立体的に明かす。

▼A5判・二二八頁／本体五、〇〇〇円

一八世紀日本の文化状況と国際環境

笠谷和比古編

日本の18世紀の文化的状況は東アジア、西洋世界をふくめたグローバルな環境下で、いかに影響を受けつつ独自に展開したか。多角的にアプローチする。

▼A5判・五八二頁／本体八、五〇〇円

徳川社会と日本の近代化

笠谷和比古編

欧米列強に互しうるだけの力を蓄えていた徳川日本の文明史的力量に着目。多分野の研究者による25篇を収録した国際日本文化研究センターの共同研究。

▼A5判・七三〇頁／本体九、八〇〇円

会沢正志斎書簡集

大阪大学会沢正志斎書簡研究会編 〔3月刊行〕

大阪大学大学院文学研究科が所蔵する会沢正志斎書簡を活字翻刻。

会沢正志斎は、後期水戸学を代表する儒学者の一人。本書簡群は、会沢が、弟子で甥でもある寺門政次郎およびその父喜太平に対して宛てた書簡を主とし、江戸に滞在していた寺門が水戸の会沢に対して定期的に府下の情報を送り続けた、その返答としての性格をもっている。また、会沢著作の書肆とのやりとりに関する記述が多く存在するのも特徴。

緊迫する幕末の情勢と、そのなかで行われた思想の営為を解明するための一級史料。



【翻刻】

弘化元年～文久三年・年末詳 計四〇八通

内 容

【解題】

会沢正志斎書簡の来歴について

飯塚一幸

会沢正志斎の政治思想と著作出版事情

奈良勝司

▼A5判・三四八頁／本体 一一、五〇〇円

備前岡山の在村医

中島家の歴史

中島医家資料館・中島文書研究会編著

江戸中期より続く在村医家に残る貴重な書籍・古文書・器物類の解説・分析を通して、当家庭代の生涯、研究論文9篇、史料翻刻5篇、蔵書目録および年表を収録。中島家の医業の歩みに光を当てる一書。

I 中島家の歴史 中島洋一（医門第九世）

中島姓の由来／中島多四郎友行／中島友三（医門第一世）／中島玄古（医門第二世）／中島宗仙（医門第三世）／中島友玄（医門第四世）／中島玄章（医門第五世）／中島哲（医門第六世）／中島一太（医門第七世）／中島達二（医門第八世）／中島家系図

II 研究論文・史料

地域医療史研究の端緒としての中島家文書（松村紀明）／中島友玄の患者の診療圏について（木下浩）／中島友玄と岡山県邑久郡における江戸末期から明治初期の種痘（木下浩）／事業者としての友玄（梶谷真司）／中島宗仙・友玄と一九世紀日本の漢蘭折衷医学（町泉寿郎）／『胎産新書』諸本について（清水信子）／『回生鉤胞代臆』からみた中島友玄の産科医療（鈴木則子） 地域社会における宗教者たち（平崎真右）／中島哲と明治期岡山の美笑流（黒澤学）

※

※

※

回生鉤胞（代）臆（板野俊文・田中健二・中島洋一）／中島友玄の京学日記（町泉寿郎）／中島宗仙書簡集（町泉寿郎）／京遊厨費録（町泉寿郎）／筑紫行雜記（松村紀明）

III 中島家蔵書目録 清水信子編

IV 中島家年表 清水信子編

▼B5判・三二八頁／本体 一〇、〇〇〇円

幕末外交儀礼の研究

欧米外交官たちの将軍拝謁
佐野真由子著

【7月刊行予定】

▼四六判・四二〇頁／本体五、〇〇〇円

近代外交の夜明けは幕末に――。

日本と欧米の国との正式な外交関係は、安政四（一八五七）年、米国総領事タウンゼント・ハリスの登城・将軍家定拝謁で幕を開けた。



本書が取り上げるのは、徳川幕府終焉まで計一七例を数えた、欧米諸国の外交官による将軍拝謁。幕府は自らの儀礼伝統に則り、同時に西洋の慣習とも齟齬のない形で、その様式を完成させていた。政治交渉の過程とは異なる次元で展開した外交儀礼の形成過程は、従来の研究で見落とされてきた、もうひとつの幕末史である。

内 容

- 序 章
- Ⅰ 幕末外交儀礼の背景
 - 第一章 徳川幕府の儀礼と対外関係
 - 第二章 欧米諸国の外交儀礼
- Ⅱ 幕末外交儀礼の展開
 - 第三章 アメリカ総領事ハリスの将軍拝謁（安政四年）
 - 第四章 試行錯誤
 - 第五章 儀礼様式の成立
 - 第六章 四カ国代表の将軍慶喜拝謁（慶応三年）
 - 終 章 「対等外交」をもたらした幕末外交儀礼

さの・まゆこ……東京大学博士（学術）。ケンブリッジ大学国際関係論専攻MPH課程修了。現在、国際日本文化研究センター准教授。

幕末期の老中と情報

佐藤隆一著

水野忠精による風聞探索活動を中心に

水野忠精を題材とした老中の情報収集を軸に他の事例も交え、幕末期の老中による政治情報収集の実態とその情報内容、さらにはこれらの扱われ方を実証的に分析することで基本的な老中の情報収集ルーットの枠組を明らかにする。

▼A5判・五二〇頁／本体九、五〇〇円

明治維新期の政治文化

佐々木克編

「九世紀における国際環境の中で、明治維新を考える」という京都大学人文科学研究所の共同研究「明治維新期の社会と情報」の研究成果。「政治文化」という視点から、明治維新期の諸問題にアプローチを試みた一書。

▼A5判・三九〇頁／本体五、四〇〇円

岩倉具視関係史料〔全2巻〕

佐々木克・藤井讓治・三澤純・谷川穰編

憲政資料室所蔵文書・対岳文庫所蔵文書・内閣文庫所蔵文書に次ぐ、第4の岩倉具視関係文書群（現在は海の見える杜美術館（広島県廿日市市）所蔵。原本校正を綿密に行い完全活字化した）。

▼A5判・総一一〇八頁／本体二四、〇〇〇円

岩倉使節団の比較文化史的研究

芳賀徹編

比較文化史的視角から岩倉使節団を論じた共同研究。編者をはじめ、日米英の八名が日米英仏伊における使節団を論じる。

▼A5判・三五八頁／本体六、五〇〇円

万国博覧会と人間の歴史

佐野真由子編

従来の研究の枠組みを超え、多様な領域の研究者のほか、万博をつくり、支える立場の政府関係者、業界関係者が集い、さらにアジア各国の研究者を迎えて、ともに議論を重ねた共同研究の成果。

▼A5判・七五八頁／本体九、二〇〇円

変容する聖地 伊勢

ジョン・グリーン編

〔6月刊行〕

▼A5判・三四〇頁／本体二、八〇〇円

不変の聖地か／変容する聖地か――。

伊勢神宮は古代から変わることなく受け継がれてきた聖域というイメージで語られる。しかし、その神宮像はそれほど時代をさかのぼるものではなく、神宮が移りかわる時代のなかで大きく変貌を遂げてきたことはあまり語られていない。古代から近・現代にわたる論考16編を収め、伊勢神宮の変容の歴史をひもとく。

……内容……

I 古 代

考古学からみた伊勢神宮の起源（山中 章）
伊勢に見え隠れする仏教 七六六―七八〇（ヘルマン・オームス）

『延喜式』制以前の伊勢神宮（小倉慈司）

II 中 世

中世伊勢と仏教（ウィリアム・M・ボディフォード）

夢告と観想（伊藤 聡）

地中の仏教（D・マックス・モーマン）

混沌の始めを守る（マーク・テューエン）

III 近 世

復活か創造か（西山 克）

読み替えられた伊勢神宮（斎藤英喜）

御蔭参りにおけるお札降り現象（劉 琳琳）

IV 近代／現代

伊勢における神仏分離（河野 訓）

神苑会の活動と明治の宇治山田（谷口裕信）

修学旅行と伊勢（高木博志）

昭和四年式年遷宮と伊勢（田浦雅徳）

戦後の伊勢（ジョン・グリーン）

補論 浮遊する記号としての「伊勢」

（ファビオ・ランベッリ）



歴史のなかの天皇陵

高木博志・山田邦和編

各時代に陵墓がどうあり、どう変遷してきたのか、考古・古代から近代にわたる陵墓の歴史をやさしく説く。京都アスニーで行われた公開講演に加え、研究者・ジャーナリストによるコラムや、執筆者による座談会を収録。

▼A5判・三四〇頁／本体二、五〇〇円

みやこの近代

丸山宏・伊從勉・高木博志編

京都大学人文科学研究所「近代京都研究会」で論じられたさまざまな分野の具体的な主題をもとに、近代現代の京都の根本問題を見通す視座を形成しようとする試みの85篇。『京都新聞』での連載を再構成し、まとめたもの。

▼A5判・二六八頁／本体二、六〇〇円

近代京都研究

丸山宏・伊從勉・高木博志編

京都という都市をどのように相対化できるのか、普遍性と特殊性を射程に入れないながら、近代史を中心に分野を超えた研究者たちが多数参加し切磋琢磨した京都大学人文科学研究所・共同研究「近代京都研究」の成果。

▼A5判・六二八頁／本体九、〇〇〇円

怨霊・怪異・伊勢神宮

山田雄司著

古代・中世社会で大きな意味を持っていた怨霊・怪異の諸相を歴史的に跡づけ、さらには親鸞や伊勢神宮といった、神と仏をめぐる領域をも射程に入れて集大成する。

▼A5判・四四八頁／本体七、〇〇〇円

神話・伝承学への招待

斎藤英喜編

これまで別々のジャンルで扱われてきた「神話」と「伝説」「昔話」について、総合的・学問的に研究する「神話・伝承学」。11の章と7つのコラムにより、魅力ある「神話・伝承学」の世界へいざなう、格好の入門書。

▼A5判・二六六頁／本体二、三〇〇円

デンマーク人牧師がみた日本 明治の宗教指導者たち

カール・スコウゴール・ピーターセン原著
長島要一訳
[8月刊行予定]

一九一一年に来日したデンマーク人牧師、カール・スコウゴール・ピーターセンによる日本印象記。無名の「西洋人」によるインタビューからは、明治末期の指導的立場にあった人々が感じていた日本の問題点やキリスト教との関わりが、時には美化され、時には赤裸々に伝わってくる。
帰国後デンマークにて刊行された「現代の日本から」を本邦初公刊。スコウゴール・ピーターセンによって「誤訳」された日本を知ること、異文化理解への再考をせまる。

▼四六版・三三八頁／本体 三、七〇〇円

内 容

解題：『現代の日本から』成立の背景と本書の着眼点／デンマークにおける日露戦争後の日本観／カール・スコウゴール・ピーターセンと日本への視察旅行
カール・スコウゴール・ピーターセン『現代の日本から』
I 山並みを越えて
II 寺社と祭り
熊本／大阪／神戸／京都／奈良／日光
III 指導者たちとその性格
蘭田宗恵／村上専精／A・ロイド／植村俊平／尾崎行雄
大隈重信／松村介石／宮川経輝／海老名弾正／小崎弘道
田村直臣／植村正久／本多庸一／中田重治／内村鑑三／井
深堀之助／原胤昭／山室軍平／賀川豊彦／矢嶋梶子

IV 訪問の成果
V 日本人の特徴
付録：宣教師イエンス・ウインテルの観察
／内村鑑三『デンマーク国の話』

ながしま・よういち：コペンハーゲン大学博士課程修了
(比較文学・日本近現代文学)。同大学DNP特任教授。

評者募集
書ター募集
ネットサポ
詳細は32頁

記念植樹と日本近代 林学者本多静六の思想と事績

岡本貴久子著

[4月刊行]

ひととはなぜ樹木を植えるのか。
近代は、実利的な造林計画、あるいは都市美運動などさまざまな場面で見え、記念植樹が大いに奨励された時代であった。
近代日本で行われた「記念植樹」を、個別の歴史事象、林学の創成と展開など時代背景と照合しながら、その活動の主導的立場にあり、方法論を構築した林学者・本多静六に注目し、彼の生家の富士山信仰・不二道の思想的影響も視野に入れながら、近代国家形成のあゆみに記念植樹を位置づける。

第一部「記念植樹」とはなにか

形態と歴史的諸相

第一章 記念植樹の形態

第二章 記念植樹をめぐる歴史的諸相

第二部 林学者本多静六の思想

第一章 不二道の歴史と思想

第二章 本多静六と明治の林学・林政

第三章 本多造林学における記念植樹の理念と方法

【内 容】
第四章 「記念植樹」の近代日本 明治・大正・昭和の系譜

第一章 学校教育と記念植樹

第二章 御聖徳と記念植樹 明治から大正へ

第三章 平和と記念植樹 第一次世界大戦後の平和記念事業を主体に

第四章 帝都復興と都市美運動 都市緑化の理念と方法

第五章 「大記念植樹」の時代 昭和戦中期の時局を基軸に

終章 記念植樹と日本人 ひととはなぜ樹を植えるのか

▼A5判・五六八頁／本体 九、〇〇〇円

おかもと・きくこ：国際日本文化研究センター共同研究員。

東京大学大学院人文社会科学系研究科修士課程修了、総合研究大学院大学文化科学研究科博士課程修了、博士(学術)。



第一期・全10巻 予定構成

- 第1巻 和食とは何か 熊倉功夫・江原絢子「二〇一五年11月刊行」
「和食とは何か」根本的な部分を明らかにする
- 第2巻 年中行事としたり 中村羊一郎「2月刊行」
日本の民俗・風習に根ざした多様な食を紹介
- 第3巻 おもてなしとマナー 熊倉功夫・後藤加寿子「6月刊行」
- 第4巻 和食と健康 渡邊智子・都築毅
- 第5巻 材料と調理 大久保洋子・中澤弥子
- 第6巻 和食の歴史 原田信男
- 第7巻 うまみの秘密 伏木亨
「和食のだしと調味料」
- 第8巻 ふるさとの食べもの 今田節子・清柳
- 第9巻 日本酒と和食
- 第10巻 緑茶と和菓子



和食文化国民会議監修

【第一期・全10巻 3ヶ月に1冊刊行】

和食の典型的なスタイル、和食文化というべき食べ方、食器、しつらい、マナー。さらに和食の食材、調理法、盛りつけなど、一番基本となる所が学べるテキストシリーズ。

▼各巻 A5判・九六頁／本体 九〇〇円

和食文化ブックレット

——ユネスコ無形文化遺産に登録された和食

墨と響きあう

町田泰宣画集

大本山廬山寺の管長、水墨画家という二足の草鞋を履きながら日本の南画界を牽引してきた町田泰宣。その圧倒的な墨の美しさには、仏教に裏打ちされた深い精神性がにじみ出ている。作者五十年の画業をたどる初の作品集。



【8月刊行】

▼A4判・一〇二頁／本体 三、〇〇〇円

オンデマンド復刊 書目一覧

受注生産のため、出荷に一週間ほどいただきます

平安期の願文と仏教的世界観 工藤美和子著「初版二〇〇八年」6月復刊	本体七、四〇〇円
平氏政権の研究 田中文英著「初版一九九四年」6月復刊	本体九、八〇〇円
中世寺社信仰の場 黒田龍二著「初版一九九九年」6月復刊	本体七、八〇〇円
日本中世の政治権力と仏教 湯之上隆著「初版二〇〇一年」7月復刊予定	本体八、八〇〇円
近世寺社参詣の研究 原淳一郎著「初版二〇〇七年」7月復刊予定	本体八、三〇〇円
江戸時代唐船による日中文化交流 松浦章著「初版二〇〇七年」6月復刊	本体九、八〇〇円
明治前期の教育・教化・仏教 谷川穰著「初版二〇〇八年」6月復刊	本体七、五〇〇円
崇徳院怨霊の研究 山田雄司著	本体六、四〇〇円
翁の生成 渡来文化と中世の神々 金賢旭著	本体五、〇〇〇円
中世京都の民衆と社会 河内将芳著	本体八、八〇〇円
中世京都の都市と宗教 河内将芳著	本体六、八〇〇円
対外関係と文化交流 田中健夫著	本体一三、八〇〇円
神仏習合の歴史と儀礼空間 嵯峨井建著	本体八、六〇〇円
織豊期の茶会と政治 竹本千鶴著	本体九、五〇〇円
日光東照宮の成立 近世日光山の「莊嚴」と祭祀・組織	本体八、五〇〇円
山澤孝著	本体四、〇〇〇円
元三大師御鑑本の研究 おみくじを読み解く	本体一、一〇〇円
大野出著	本体四、八〇〇円
近世吉野林業史 谷彌兵衛著	
明治博物館事始め 椎名仙卓著	

ネット書評サポーター 募集!!

小社刊行の新作について、ご自身のブログやSNSで本書の書評コメントを書いていただける方に、書籍を献本します。

◎応募要項◎

募集内容…書籍ごとの募集です。募集書籍は左記をご参照下さい。
字 数…特に制限しませんが最低でも800字以上はお書きいただくようお願いいたします。

発表媒体…ご自身のブログ、facebookなど、インターネット上で一般公開されているもの。

アマゾンのレビューなどネット書店のレビューは対象外です。特定の範囲にしか公開されていないもの、一時的にしか公開されないものは除きます。

facebookの場合は、投稿の公開範囲を「公開」にしていた必要があります。

発表期限…書籍送付後3か月以内に公開してください。

申込方法…メール (pub@shibunkaku.co.jp)・FAX・郵送で左記の項目をお知らせ下さい

書評していただける書籍

発表する媒体

(媒体を確認できるURL(アドレス)を合わせてお知らせ下さい)

申込に当たってのアピールポイント

お名前・ご所属・書籍お送り先住所・電話番号・メールアドレス

審査結果の通知…各書籍募集締切後、採否の結果をお知らせします。審査の内容についての問い合わせには応じられませんのでご了承下さい。

現在募集中の書籍は左記の通りです。
今後も随時、募集いたします。乞うご期待!!

書目

ネット書評サポーター 募集

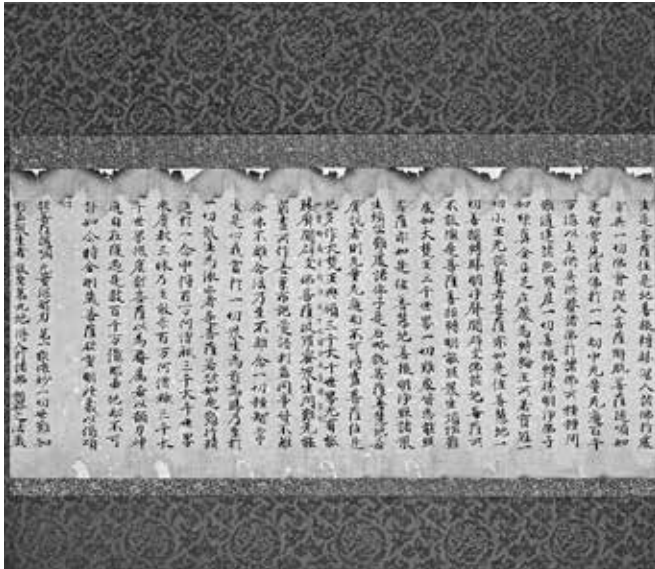
売茶翁の生涯 (表2掲載)
デンマーク人牧師がみた日本 (30頁掲載)

募集締切 募集人数
8月10日 3名
8月10日 3名
3名

美の縁

び

よすが



装飾華嚴經の零葉であり、本經の僚巻に「泉福寺常住」の朱字長方印が押されていることから、もと河内の泉福寺に伝来した物であることが知られています。伝来途次に火難に遭ったため料紙の天地に焼痕を残すところから、世に「泉福寺焼經」と称されています。天地を大きく欠損していることが多い中、本幅ほど消失の程度が少ないものは稀でしょう。

料紙には藍の漉きかけ紙に金の捺箔を散した非常に美しい紙を使用しており、この料紙を使用した作例は時代がある程度限られるため、書写年代は十二

◆ 泉福寺焼經 藍紙華嚴經 断簡 ◆

せんぶくじやけきょう あいがみけごんきょうだんかん

世紀前半と思われる。金泥で界線を施し、概ね一行十七字で書写された筆跡は謹直かつ端麗で、平安の雰囲気をよく今に伝える筆致です。

残念ながらどのような経緯で火災に遭ったかは判然とせず、伝来の波乱万丈を物語る焼痕は痛ましくもあります。藍紙や捺箔の美しい装飾と交じり合うことによって、鑑賞上の価値をより一層高める稀有な趣を湛えています。平安時代の遺風が漂う非常に美麗な装飾経として、その価値は極めて高いと言えるでしょう。

(思文閣出版古書部・西原達也)

スマートフォン・タブレット専用 思文閣の査定申込みアプリ



丁寧なガイダンスとカンタン操作で、査定申込みをお手伝いします。
思文閣の専門スタッフが
お手持ちの作品を丁寧に拝見、
後日査定結果をお知らせいたします。

無料配信中

「美術品査定」で検索、無料ダウンロード



京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355
TEL(075)531-0001 FAX(075)531-5533
<http://www.shibunkaku.co.jp/>
satei@shibunkaku.co.jp

思文閣古書資料目録

※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・古地図・錦絵など、あらゆるジャンルの商品を取り扱っております(年4回程度発行)。
※ご希望の方は、下記、思文閣出版古書部までお問い合わせ下さい。



蘭花譜 一帙

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355
TEL(075)752-0005 FAX(075)525-7155
<http://www.shibunkaku.co.jp/kosho/>
kosho@shibunkaku.co.jp



美術品の架け橋、 思文閣大交換会

思文閣大交換会は、年四回の大入れ会。
お客様のもとで受け継がれた価値ある美術品を、
求めている方へとお引き合わせします。

ご出品をご希望の方は、まず査定のお申し込みを

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355
TEL(075)531-0001 FAX(075)531-5533
<http://www.shibunkaku.co.jp/>
satei@shibunkaku.co.jp



思文閣京都本社は、昨秋、約二十年ぶりの改装を終え、
時代や形式を超えて生きるすぐれた美を展覧するに
ふさわしい空間になりました。

SHIBUNKAKU
思文閣

〒605-0089
京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355
tel: 075-531-0001 info@shibunkaku.co.jp